



クリスマス

企画

クリスマス企画について

みなさま、お久しぶりです。

クリスマスですね。

愛する人と幸せに過ごす人もいれば、それを指をくわえて見つめる人もいる。

そんな異常な光景を見ることのできるクリスマスですが、そもそもクリスマスはイエスキリストの誕生日ではないそうです。

イエスキリストの「降誕を祝う」日であり、12月25日に生まれたとは聖書にも明記されていないのだとか…。

しかも、伝統的キリスト教「正教」では、現在使用されているグレゴリウス暦ではなくユリウス暦を使用しているために、ユリウス暦の12月25日は現在の日付で言うと1月7日に当たるので、日本で言う「七草の日」にクリスマスを祝うんだそうですよ。

こうなると、もはやロマンもクソもないですね。

今回はただ単なる「クリスマス」ではなく「同性愛」もテーマに短編を載せてみました。

ぜひぜひ読んでみてください。

(編集：木村)



イラスト：さあきゅう



「サンタクロースの正体は子どもに明かすべきか」というのは複雑な問題だろう。しかし愛する子どものことを想うなら明かすべきだ。

子どもは毎年クリスマスを迎える度に、徐々に彼の正体に気付いていくものだ。しかし心のどこかでは「サンタは存在する」と信じてやまない。信仰は子どもの心を強くする。同時に、だからこそ、彼の正体を知ったときは深く傷つく。その傷を大切にしてほしい。それはやがてすると茎を伸ばし、いつか「優しさ」という名の花を咲かせるのだから。

それが父さんの最期の言葉だった。俺の十三回目のクリスマスのことだった。

そして今夜は俺の二四回目のクリスマスだ。俺は自分の部屋に籠もって、ベッドに体を埋めていた。枕元では父さんからプレゼントされたクマのぬいぐるみが微笑んでいる。と、誰かが乱暴にドアをノックした。

「ハンス。そろそろ行こうぜ」

「もう出発？ 早いんじゃない？」

マスだった。俺はベッドから飛び起きる。

「十時だぞ。もしかして寝てたのか」

「まさか。微睡んでただけ」

ドアの向こうからわざとらしいため息が聞こえた。

「先に行ってる。プレゼント忘れるなよ」

わかってるよ。ドア越しの会話を終えると、俺は着ているシャツを脱いだ。クローゼットから真っ赤なフワフワの仕事着を取り出して身に纏う。真っ赤な帽子も忘れない。

作業机の上に置かれている大きな袋を担ぐ。中にはカラフルなりボンの付いた箱がいくつも入っている。クリスマスプレゼントだ。その数は年々減少しているが、それでも袋はかなりの重さになる。日々のトレーニングで鍛えられた俺の筋肉ですら、思わず悲鳴を上げるほどだ。俺は屋上を目指して部屋のドアを開けた。廊下に足を踏み出すと父さんがリビングから出てきた。彼は俺の全身を眺めて顔を崩した。

「仕事着が似合うようになってきたな」

「おかげさまで。早く終わらせて帰ってくるから。コーヒー用意して待っててよ」

「モーニングコーヒーにならんといいがな」

がんばれ。彼は俺の背中をちから強く叩き、階段を下りていった。俺はなんだか嬉しくなって微笑みながら、屋上を目指し階段を上った。一段上る度に階段がギィと音を鳴らした。

屋上へ出るとマスが地べたに寝ころんでいた。俺と同じく赤い仕事着に身を包んでいる。

「お待たせ。晴れてよかったね」

彼は欠伸をしながらゆっくりと立ち上がった。

「寒いことに変わらないけどな」

「冬生まれだろ」

「関係ねえよ。いつ生まれでも寒いものは寒い」

屋上は確かに冷たい夜風がひっきりなしに吹いていて寒かった。こんなクリスマスの夜はあの日を思い出す。

俺の両親は火事で死んだ。十三歳のクリスマスの夜だった。同じ寝室で眠っていたが、俺だけが助かった。マスの父親が俺を見つけて救出してくれたのだ。彼は俺を助けてくれた上に、養子として引き取ってくれた。

俺を助けてくれたのが彼で本当に良かったと思う。こんな境遇にもかかわらず日常に幸福を感じられるというのは、自分でも信じられないことだった。

それは第二の父親と母親のおかげであり、そして何よりマスのおかげだろう。彼は養子として引き取られて来た俺をすんなり受け入れてくれた。俺と同じ十三歳という幼さで、まだ両親を独り占めしていたい頃だった。にもかかわらず、彼は嫌な顔ひとつせずによろしくなと俺に握手を求めてくれた。俺はその手を握って、ありがとうと返した。そして俺たちは本当の兄弟のように育った。

白い息を吐きながら、俺とマスは肩を並べる。彼がパイと指笛を鳴らすと、数匹のトナカイがソリを引きながら飛んで来た。シャンシャンと鈴を鳴らしながら俺たちの前に着陸し、そのうちの一匹が大きな声で鳴いた。

「さあ仕事だ。マス、かけ声の準備は？」

「できてる」

俺はいつも、クリスマスには二つの仕事がある。

一つは死んだ両親の墓参り。そしてもう一つは――

――聖夜に蔓延るリア充どもを一匹残らず爆発させることだ。

俺たちは聖なる夜空に叫ぶ。

「「リア充爆発しろ！！」」

神の名の下、うつし世のリア充に裁きを下す！

アーメン！ 俺たちは聖なる街へ飛び出した。

華やかなクリスマスの始まりだ。

プレゼントをソリに積み出発した。中身はもちろん爆弾だ。ソリの運転はマスの仕事で、俺は隣で地図を広げ目的地までのルート案内を行う。

「メイン通りをしばらく直進」

「おう。……お前は寒くねえのか？」

「マスと違って末端冷え症じゃないもん」

ちくしょう、運転替わってくれよ。彼は愚痴をこぼしながらも顔は前を向いたまま、じっと運転に集中している。と思うと、俺の目の前に手を差し出してきた。

「寒くないなら俺に体温くれよ」

「ん」

俺はぎゅっとその手を握る。

「あったけえ」

「……つめたい」

俺の手は温度を奪われ、彼の手はゆっくりと熱を帯びていった。俺は自分の心拍数が上がるのを感じながら、それを彼に悟られないようにずっと下を向いていた。

「サンキュー」

彼はぱっと手を離して、また運転に集中した。

「次の信号を左、それからすぐ右」

「おう」

通りを行き交う車のライトはイルミネーションのようで綺麗だ。俺はそれをぼうっと眺めた。

マスはきっとそうは思わない。ちっぽけな車のライトじゃねえかと吐き棄てるんだろう。

「そういうところが好きだ」呟いた言葉は、隣に座る想い人の耳に届くことなく、ふたりの間に沈んで消えた。

俺たちの家庭はキリスト教の「ニコラオス教」という宗派で、ミラ・リキヤの大主教聖ニコライを崇めている。

聖ニコライに関する有名な記述には「かつて栄えていたとある家が没落して金銭を失い、娘達を売春させなければならなくなった。そこで聖ニコライは夜中に、窓から多額の金を家の中へ投げ入れて彼女らを救った」という逸話がある。教徒はその話に従い「弱者に真理を教えることに務めよ」という教義を守っている。自分の家庭がキリスト教だったこともあって、俺はすんなりその教えを受け入れることができた。

教徒は初め聖ニコライに倣って、クリスマスには善人に菓子を、悪人には石炭を与えていた。それが長い年月の間に変化し、今では悪人へ石炭を与える教えのみが残っている。結局のところ、この宗派は聖ニコラスの従者が後続を懸念して創設したものなのだろう。

アリウス派と対峙していた痕跡が強く残っており、イエス・キリストの神性を否定する者、す

俺は爆弾を床に置き、装置のキーを操作した。「あと六分で爆発する」

気付くと女が口を押さえ泣いていた。雫が両目からぼろぼろと床に落ちる。心が締め付けられる錯覚に襲われる。俺は頭を揺さぶった。

「泣いても俺の父さんと母さんは帰ってこない」

「今は俺たちがお前の親だ。違うのか」

黙れ人殺し！ 盤を叩き、爆弾の起動を六分から一分に早めた。少しでも早く彼らの元を去りたかった。彼らの声を聞いて気持ちが揺らいでいるのが自分でもわかっていた。

「お別れだ」

踵を返して彼らに背を向けた。ハンス。男が声をかける。俺は構わず歩き出した。爆弾がピピピと鳴った。もう爆発する。

「.....すまなかった」

ハンス。どうか幸せに。

父さん！ 振り返ると同時にリビングが爆発した。爆風で廊下の奥まで吹き飛び壁に叩きつけられる。体を起こしリビングへ走ろうとした。しかし廊下の半分までが爆発で崩壊し、さきほどまでリビングがあった場所には虚無が広がっていた。俺はその場に崩れ落ち、声を押し殺して叫んだ。

炎はぼうぼうと廊下にまで進み、やがて家全体を包み込んだ。逃げ出す気力も無く仰向けに転ぶ。見知った天井が黒く焦げていくのが見える。

ああ、すべてが無に帰っていく。

俺があの日救われたことは間違いだったのだ。あのとき父さんと母さんと一緒に死ぬべきだった。そうであったなら、俺は第二の両親を殺さずにすんだのだ。俺の大切な人。そしてマスの大切な人。

そうか。マス。

君はきっとこのことを知らなかったんだ。俺と同じように疑念を抱いて苦しんでいたんだ。自分の父親が俺の両親を殺したんじゃないかって悩んでいたんだろう。そんなことに今更気付いてしまった。ごめん。君と俺は同じだった。俺たちはその苦しみを分かち合うべきだった。

俺は君が好きだ。でも、愛し方を知らなかった。君は俺より素敵な人と結ばれるんだ。そしてずっと、ずっと幸せに生きるんだ。

父さんの言葉がふと脳裏に蘇った。

一一傷を大切にしてほしい。それはやがてするすると茎を伸ばし、いつか「優しさ」という名の花を咲かせるのだから。

俺は優しくなれなかったな。でもマスはきっと、美しい花を咲かせることができる。

マス。どうか幸せに。呟いた言葉は誰の耳にも届くことなく、火の海に呑み込まれた。

缶コーヒーは甘ったるくて俺の口に合わない。俺は缶を半分ほど飲んだところで嫌になり、公園のゴミ箱に投げ込んだ。

「やっぱりお袋の煎れたコーヒーじゃなきゃダメだな」

抱いている赤ん坊の頭を撫でる。泣き疲れてぐっすり眠っているその顔はとても安らかな表情をしていた。空を見上げれば明るい星が、雲一つ無い空に浮かび瞬いている。

「.....帰らなくちゃな」

手のひらを見つめるとハンスからもらった体温がすっかり無くなり、冷え切っていた。帰ろう。きっとみんなが待ってる。

今日はクリスマスだ。



悠利^{ゆうり}が髪を明るく染めてきたときは驚いた。でもその一件以来、彼に対する周りの態度は変わった。少し距離を置いていたクラスメイトはそれをタネにして悠利に話しかけた。彼は照れてるんだか緊張してるんだかよく分からない、不細工な顔をして無理やり笑っていたけれど。悠利はあまり人と関わることを好まない奴だった。まあ、僕ほどではないけれど。絡まれる様子を見ていた他の生徒も、興味をもってその輪に入ってくる。いつしか彼は、すれ違う大体のクラスメイトと挨拶を交わす程度には仲良くなっていた。

もう僕なんか要らないんじゃないか。そうこぼしそうになって、はっとする。馬鹿げたことを構ってもらっているのは、僕のほうだというのに。でも、もしかしたら、きっと、この「繋いだ手」を誤魔化すために、彼はそんな柄にもないことをしたのかな、なんて考えては顔から火が出る思いがした。

母さんが撃たれたのは十二月のロンドンで、その日の朝、僕はマフラーをして出掛けなかった。彼女が買ってきたのは暖かそうな、パステルイエローにグレーとピンクが幾何学模様を描いたような柄で、一目見た瞬間からこっ恥ずかしかったのだ。十一歳という僕は、目に映るものに過敏で、目に映りこむことを毛嫌いだ。そのくせ、母さんが新しい法律に反対するデモ団体に参加していたことなんて気にも留めなかったのだから、僕は心の貧相なただの子供だった。その手を払いのけるように家を飛び出したことが、二度と忘れられない「最後」になってしまうなんて。想像できるもんか。あのマフラーは母さんの形見になってしまった。

色々話し合った結果、父さんは僕を連れて、東京行きの飛行機に乗った。六つ年上の兄も誘ったが、彼はロンドンで行きたい大学があると言って、母方の祖父母と暮らすことを決めた。父さんが目に見えてやつれていくのを見かねて、日本に戻ることを勧めたのは祖母だった。父さんと母さんが結婚したてのころに一度日本を訪れていた彼女は、山間部にある小さな集落の様子をよく覚えていた。街から遠く離れた、駅に行くことさえままならない片田舎は、時間の進み方が少し違うような気がしたの、と彼女は教えてくれた。

果たして僕は、初めて父さんの故郷に足を踏み入れた。正確に言えば、幼い頃に一度ここに来たことがあるはずなのだが、何分ひとつも思い出せることがない。父さんにきくと、三つの時だから無理もないさと気のない答えが返ってきた。事情はすでに伝達されているのだろう、祖父母はまるで、今日の朝出かけた息子が帰ってきたとでもいうように、屈託なく迎え入れてくれた。僕は白人である母さんの肌色を受け継いでいたので、祖母に頬を両手ではさまれ、雪ん子みたいなやなあ、と笑われた。いつもげんこつ飴をくれるので、僕はその味と一緒に彼女のことが好きになった。

悠利は、いつもあぜ道で僕を待っていた。小中合同校舎の分校は父さんの実家から歩いて四十分のところであり、僕の同級生は悠利だけだった。初めて会った時彼は田んぼをのぞきこんでいて、木の枝で積もった雪を引っかきまわしていた。僕がじっと悠利を見つめると、彼は僕に気づいて、しばらくお互いに目を合わせたまま黙り込んでいた。季節はいつのまにかフキノトウを芽吹かせ、溶けだした雪はあぜ道をぬかるませていた。僕は一言も口をきかずに、そのまま走って家に帰ってしまった。

母さんが死んだあの日から、僕は身内以外の人間と一切関わりを持たなかった。それどころか、顔見知り暮らしロンドンを去り、話し慣れない言葉が飛び交うまさに未知の世界で、正直途

方に暮れていた。四か月が経ち、ようやく、少しずつこの先のことを考えられるようになって、今更父さんについてきてしまったことを後悔しはじめていた。母さんに対する喪失感が大きすぎて気付かなかったのだ。

ずっと差し出された悠利の手には、パステルイエローのマフラーが掴まれていた。祖母がランドセル代わりにと縫ってくれた ずた 袋に結び付けていたのが、いつのまにか落ちてしまったらしい。受け取ろうとした途端、僕の指先はわずかに震え出した。やわらかいそれをぎゅっと握ってみても止まらない。再びずた袋に結び直そうとしたが、うまくいかなかった。風邪をひいたみたいに身体の芯が冷え込んで、視界が色あせる代わりに、しまいこんでいた光景が蘇る。パステルイエローを差し出した手は暖かかったのだ、あの日までは。

悠利が俺の手を握ってくれるようになったのは、多分、その頃からだと思う。はじめは、冷え性だとか身体が弱そうとか、コミュ障だとか、そんな風に思われていたらしい。日本語が話せないんじゃないかとさえ疑われていたと知った時はちょっと笑った。確かに、最低限の返事くらいしかしなかったはじめの僕は、そう見えてもおかしくはなかったかもしれない。一応バイリンガルに育ててはもらったが、いざ話すとすると、やっぱり慣れが必要だと感じた。方言に関しては悠利がよく教えてくれたので、二割程分からなかった祖父母の言葉が聞き取れるくらいには上達した。

分校で、悠利と俺はセットのように扱われた。もちろん同学年の二人、という理由が一番だったが、彼は俺がくるまでいつも一人で遊んでいたらしい。だって一人の方が楽しいじゃん、なんて悠利は言っていたけど、本当にそう思ってるかなんて、正直どうでもよかった。だって、じゃあなんで俺とは一緒にいるんだよ。そっちのほうこそコミュ障なんじゃないのか。でも、悠利は学校で何かしらの行事があるたびに、ステージに上がっていた。演じている時だけはまともに見えるから不思議だった。疲れ果てた放課後は、いつも俺の手をすがっているような気がした。そういう時だけ、俺は握ってあげる側になった。そういう時だけ、二人でこの世界に取り残されてしまったみたいに胸が軋んだ。

僕の事情を知っている先生たちは、僕が悠利と手を繋いでいることに関して何もきいてこなかった。同じ教室で授業を受けていた下級生は、手のことよりも瞳の色を気にした。漆黒のなかで僕のヘーゼルは少しだけ異彩だったみたいだ。上級生は女子生徒しかおらず、小柄で無口な悠利はよく彼女らに可愛がられていた。ついでに僕にもお菓子をくれた。

まるでシェルターみたいだな。僕らはその緩衝材に守られて、「繋いだ手」は無菌状態のまま、身体だけが成長していく。

悠利がどこの高校に行こうか、僕は彼についていこうと思っていた。というか自分の進路に関して、なにひとつ関心が持てなかったのだ。「日本語だから」と少々身構えて勉強したことがよかったのか、近辺の高校ならどこでも行けるだろうというお墨付きをもらい、好きな科目しかまとも点数がとれない悠利の進路に合わせるなど容易い、と短絡的に考えていた。だから、彼が東京にある芸術高校のパンフレットを持ってきたときは度肝を抜かれた。

悠利は多くを語らなかったが、彼の家では結構な揉め事になったらしい。話が二転三転し、千葉に住む親戚の眼界ならいい、というところに帰結したようで、悠利は嬉しそうに許可がおりたことだけを報告した。僕の方はというと、ようやく父さんは僕にジョークをかますほど元気になったかと思ったが、「ロンドンに帰る」というのはジョークじゃなかった。もともと向こうにある某出版社の専属装丁家だった父さんは、日本にきてからはフリーで細々と仕事を続けていた。日本に持ってきた最低限のDTP機材ではやはり不満があるようで、こちらで前の職場以上の仕事も見つけられず、僕の学費を稼ぐためにも元の出版社に戻りたいのだ、と父さんは言った。でも多分、本当はどこかでずっと、母さんの眠るあの街に帰りたかったんじゃないかなと僕は思っている。高校に行く話をすっかり祖父母に丸投げした父さんは、生氣を取り戻したように颯爽と飛び立っていった。

悠利は千葉の親戚の家に居候することになり、僕は高校近くの寮に入った。僕らは同じ学び舎を手に入れたが、通学路はてんで被らず、挨拶を交わすのは校門前になった。舞台を選んだ彼とデザインを選んだ僕が、同じクラスになれる選択肢はなかった。

はじめのうちは慣れない環境に適應することに忙しく、新しい顔ぶれや声のトーンを拾うことに時間を浪費していた。でも、僕の片隅にはいつも「繋いだ手」があって、次第に、一目を避けるように、何気なく、彼の姿を見つけては、その指先を求めるようになっていた。休み時間のたびに会いに行った。空き教室で一緒に惣菜パンをかじった。閉室ぎりぎりまで図書室にいた。そのあとファミレスやファーストフード店に入って、終電ぎりぎりまで駄弁することもあった。

僕から彼の手に触れるようになったのはいつからだろう。まるで触れる権利でもあるかのよう

に僕はそうするけれど。悠利から僕の手に触れることがなくなったのはいつからだろう。今更僕は、彼を追って東京にきてしまったことを後悔しはじめた。

悠利が髪を明るく染めてきたときは驚いたけれど、案外似合っていたものだからつい辟易してしまった。女子生徒が好奇の眼差しを向けていたのは、もちろんその珍しいシルバーアッシュのせいだが、話し声は心なしか色づいていた。廊下で話しかけられたことなんか一度もなかったくせに、クラスメイトだという男子が悠利に絡んだ。もちろん、牽制されるような野暮なことはなく、話すきっかけが欲しかったんだろうか、気付けは最近見た映画の話で盛り上がっていた。

あっけなくホームルーム後に呼び出しをくらい、昼休みに生徒指導を受け終えて職員室から出てきた悠利に、僕はつい、黒染めしちゃうの、ときいてしまった。首をふった彼は学生手帳を開きながら、はっきり禁止されてないから強制できないんだって、とおかしそうに頬をゆるめた。僕は目を合わせずに、その銀髪をくしゃくしゃにした。

悠利がはじめてピアスをあけたのは試験終わりの放課後で、彼の耳たぶに針を押し当てたのは僕だった。弾けるような音をたててピアッサーが押し込んだアメジストのファーストピアスに、僕は、僕の手で彼に傷をつけた高揚に震えながら、虚しさに押しつぶされそうになっていた。悠利が笑いながら「二月はお前の誕生日だね」と言って僕の耳たぶをつまんだ。あげたげようか、と顔をのぞき込まれたけれど、結局最後まで覚悟ができなかった。悠利は片耳だけしか開けなかった。

アメジストが外れる頃に、僕は彼の舞台を見に行った。地下一階の小さなハコで、役者との距離が近かった。彼はいつそう人間らしくなって、世界平和みたいな声で空気を震わせた。ああ、彼にはこうやって人を幸せにする力があるんだなあ、と思った。彼が、僕の知っている彼を見せることは一度もなかった。夏休みに会ったのは、その日が最後だった。

東京駅に雪が降る。胸をはやらせて寮を飛び出してきたというのに、僕が電車を降りる頃にはやんでしまったらしい。ほんの一瞬の出来事だったようだ。

「まだ十二月だよ」

肩を叩かれて振り返ると、ネックウォーマーで口元が隠れたまま、悠利が話しかけてくる。

東京駅に雪が降る、ということを最初に伝えたのは悠利だった。行ってみようか、と言ったのは彼だった。僕は即答した。多分、雪のせいだけじゃない。

「ロンドンには雪が降らないんだ」

ふてくされて特にあてもなく歩き出す。

「田舎で散々遊んだら」

一歩遅れてついてくる足音を、つい引き寄せたくなってしまふ。

「雪の積もったレンガ造りが見たかったんですー」

ちっとも面白くないことに大受けしている彼は、後ろから僕の背中をばしばしと叩いた。

「ねえ、手繋ごうよ」

あんまり突飛だったから、僕はなんの取り繕いもしていない顔を彼に見せてしまった。それで十分だというように、彼は僕の手指先を絡めた。僕らはこれまで、相手に許可をとったことがなかったのだ。手の繋ぎ方を忘れてしまいそうだ。

悠利とクリスマスの東京を歩けるなんて、本当に想定外だった。雪が降る、というのも誘い出す口実なんかじゃなくて、ただ、いつもどおりならだとしゃべって暇を持て余したかっただけなのだ。現にもうあたりは暮れかけていて、今から遊びにいこうにも、足を延ばせるところなんてたかがしれている。どこにいこうにも、手を繋いだ二人があふれかえっている。こんな時間に遠出をした悠利は何を考えているのだろうか。僕の部屋に泊るつもりで来たんだろうか。

「せっかくだからイルミネーションでもみようぜ」

その前に飯食いたいなーと言いながら、ケーキショップのショーケースに早速足止めされている彼は、僕が良く知る少年だったので安心する。親しみ慣れた手を引くと、あいた手が首元に差し込まれる。ひやとした感覚に、カイロ代わりにされているのだと気付くと、すっかりごま布林になった髪をぐしゃぐしゃにしてやった。

クリスマスだから贅沢しようか、なんて言っても、夕飯時のレストラン街はどこも混んでいて、駅構外にあったガラ空きのラーメン屋に入った。評判のいい店に混みあわず入れるとは、思わぬ幸運を発見したなど二人で妙に喜んだ。

「女子がクリスマスに食べたくないランキング一位なんだって」

もやしを着々と減らしながら、悠利がトッピングの煮卵を注文する。

「ムードないから？」

悠利の箸が僕のもやしをつまんだので、反撃しようとする、そのまま口の中に押し込められた。噛みしだいて、飲み込む。彼は、もう煮卵にかぶりついていた。目が合う。しばらく睨み合って、それから馬鹿にしたように笑う。これ以上、何が欲しいっていうんだろう。

イルミネーションは、思っていたよりも感動した。彼が歩きたいように歩くので、僕はすっかり連れまわされてしまったのだが、人波をかき分け、恋人たちのささやき声をきき、光でぼんやりと照らされた彼の横顔を見ているうちに、なんだか力が抜けてしまった。外気にさらされた頬は凍りつくように冷たいはずなのに、身体が火照って仕方がない。風邪をひいてしまったのかもしれない。

悠利が僕の身体を支えてくれた。ふらふらしているのがばれてしまったみたいだ。

「体調悪いのか」

咄嗟に首をふった。ただ、彼なしでは立ってられない。

「眠い？」

はは、子供じゃあるまいし。

「とりあえず、どっか座ろ」

彼が再び歩き出してしまう前に。僕は。ああ僕は。なんてくだらないことを思いついてしまったんだろう。

「悠利、クリスマスプレゼントがあるんだ」

「え、まじで」

「目えつぶってみ？」

疑いなく、ぎゅっと閉じられた双眼が愛おしくて、そっと指先でなぞる。目つぶしやめて一、なんて言いながら笑い声をあげた彼に、もう偽ることはできなかった。唇を奪う。奪った瞬間、これでもう、ああ、そうなんだ、と思った。柄にもなく涙がこぼれそうで、でもそのおかげで、笑顔をつくることができた。

「『終わり』をあげよう。今日まで僕を支えてくれてありがとう。友達でいられなくてごめん。これで最後だから、どうか我儘を許してくれ」

そっとしゃがみこんだ悠利を追って膝をついた。頬をはさんで、再びそこを求める。最後だから、最後だから。そっと口をあける。舌先に熱を帯びた柔らかさがあたる。からめとる。くわえる。染み出したすべてを、音をたてて飲み込んだ。

伝った涙が口の中に入り込んで、しょっぱさと同時に唇を放す。むせてしまった。瞳をのぞきこまれる。目を合わせたまま、お互いに黙り込んでいた。

「俺もクリスマスプレゼントあるよ」

「え」

「目つぶって」

泣いた後の瞼の重さと、彼の率直な視線に、ゆっくりと光を遮る。抱き寄せられた。あたたかいものが触れている。

「『始まり』をあげよう。今日からまたよろしくね。友達じゃなくても一緒にいいな。最後だなんて言わないで。俺も夏^{かなん}楠のこと好きだよ」

再び押し付けられたそれは、ぎこちなく小さな音をたてて、そして、そっと僕の唇をわった。探るように、伝え方を選ぶように、掬い上げるように。目があけられない。息を漏らすのが勿体ない。

それは恥ずかしいくらいに心地よい、悠利からのキスだった。



クリスマス企画

<http://p.booklog.jp/book/93468>

著者 : kemmy

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kmit-kemmy/profile>

発行 : 日本大学芸術学部文芸学科 サークルKMIT (ケミット)

URL : <http://kmit.weebly.com/>

作品執筆 : 亮月冠太郎/藍 那

イラスト : さあきゆう

編集人 : 木村千佳

発行人 : 松原葵

web project 「ABECHANGE」 HP

<http://kmit-project.weebly.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/93468>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/93468>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ